佐藤 尚中 伝 (5)

A Biography of Shōchū SATŌ, the Founder of
the Juntendo Hospital in Tokyo (5)

小 川 鼎 三*
TEIZO OGAWA, M.D.

尚中の結核書翻訳
(長崎にて文久元年10月成る)

順天堂大学所蔵本の中に「雲埜児理略血勞瘵篇全」と題する和紙60枚を綴じた1冊があり、比較的近年に私どもが古本屋でふとみつけて購入したものである。

本文は略血篇で始まるが、その最初に「千八百五十五年鑲行 独乙 烏雲埜児利伊著、文久元年辛酉十月 日本 佐藤舜海重訳」とあり、尚中が長崎留学中にドイツの有名な内科医 ウンデルリヒ Carl August Wunderlich (1815~1877) の肺結核に関する著書を蘭訳本を通じて邦訳したものとされる。題名の勞瘵篇は勞瘵篇の誤写でないかとおもう。それは東洋文庫所蔵本の中に「雲埜児理略血勞瘵篇」が藤井尚久博士の蒐集したものの中に存在し、その内容がほぼ一致するからである。

この東洋文庫本は大野貞斎が筆写し所蔵したものと思われる。「貞斎之印」の蔵書印があり、蘭文で Oono teesai の蔵する本と記されている。大野貞斎は緒方洪庵の「適々齋塾姓名録」で第637番すなわち最後にその名前が載り 元治甲子元年7月入門、上総夷隅郡の人とある。かれが大阪の緒方塾に入ったとき洪庵はすでに江戸に移って病没し、おそらく養子の緒方拙斎がその塾をあずかっていたであろう。いずれにせよ題名の中で勞瘵が正しく、勞瘵は誤りと考える。しかしウンデルリヒを漢字で表わした中の埜と埜とはいずれが正しいか、後者に幾ぶん利があるように感ずる。

* 順天堂大学医学部客員教授 (医史学)
Department of Medical History, Professor of
Juntendo University, School of Medicine
[May. 6. 1973 受付]

ウンデルリヒの略伝は筆者がすでに「ベルツ伝」(ベルツ賞事務局発行、昭和45年4月)に書いた。明治日本の医学発展に大きい役割をなしたベルツ Erwin von Baelz、有名な内科教授のストリュムペル Adolf Strümpell など錚々たる内科学者が若いときライプチヒ大学で彼の門下であった。

ウンデルリヒは、ネッカ川に沿ったズルツ Sulz という所で生れ、スツットガルトで教養課程を卒えてチュービンゲン大学で医学を修めた。大学で彼はすぐにパリにゆき修業を重ねて、とくに打診と聴診のやり方をおぼえてスツットガルトに帰り、ついで母校チュービンゲン大学の私講師となった。名声が日増しに上って1846年に同じ大学の内科正教授となり、1850年からはライプチヒ大学の内科を受け持って、27年後に死ぬまでその席にあった。彼の内科全書 Handbuch der speziellen Pathologie は 1846~50年にでている。

ウンデルリヒの功績として最もよく知られているのは体温表を作ったことで、今日いづれの病院でも患者の枕頭にぶら下っている赤い線でかいた体温の変化をひと目で示す表は彼がはじめたという。体温を測ること自身は古く17世紀にイタリアのサントリオ S. Santorio がはじめ、体温計も18世紀にオランダのブールハーヴェ H. Boerhaave が作っていたが、体温の変化を示す曲線をいかに読み、いかに理解するかはウンデルリヒの創始した重要な診断法とされる。

さて尚中が長崎で訳したウンデルリヒの肺結核の書が単行本なのか、大冊の中の一部なのか目下のところ不明である。いずれにせよ蘭訳本を紹介したにちがいない。

そしてこの翻訳の動機として佐倉に在る妻サダ

が文久元年2月中旬に吐血したことを尚中が長崎で彼への直接ではない手紙で知り、大いに心痛して金井右膳あてに書いた4月27日付の手紙(前述)が考えられる。もしかすると彼はそのころからウンデルリヒの肺結核書を訳しはじめたのではないか。和紙60枚を綴じた相当の分量であり、ポンペに就学の間にやるとすれば、幾らがんばってもかなり永い日数を要したであろう。そして関寛斎の長崎在学日記の文久元年10月16日の条に、

「松メース内科書三枚、佐メース咯血篇一時ヨリ二時マデ、松メース二時ヨリ三時マデ」とあるので、尚中が咯血篇の講義をしたと思われるが、それがこの訳本完成の時すなわち「文久元年辛酉十月」と一致している。

いま手もとにある雲埕児理咯血治療篇の内容を詳しく述べる余裕はないが、巻頭の目次を基にして、各章の題目を掲げ、少しく説明を加える。

咯血篇

第一. 気管血及ヒ肺血

第二. 気管溢血ノ原因及ヒ病理解剖ヲ論ス

第三. 肺房溢血及ヒ病理解剖ヲ論ス

第三(四の誤りか)、破裂出血ノ病理及ヒ解剖ヲ論ス

識別

治法 (そのなかにフランスの大家ラエンネク Laennec, アンデル Al Andral の名がでる)

肺結節 (今日の肺結核を指すのであろう)

第一. 原因論

誘起〔結節ヲ発起シ或ハ之ヲ誘出スル外感〕

体中一部(本文で一品とある)ノ営為肺結節スル者

職業ニ関渉スル者

四季ニ関渉スル者

地方ニ関渉スル者

伝染〔健全無病ノ人肺結節ヲ感受スルト云ハ信スヘカラス恐ク肺ヲ恐ルル甚シキヨリシテ起ル伝聞ノ過ナルヘシ然レドモ己ニ其素質ヲ有スル人ハ其病者ト集居同房ヲ避ケ其排泄物(汗, 大便, 痰)ヲ嗅クヲ禁ス〕
(コッホ R. Koch による結核菌発見の前で

あり、伝染病であることの確認が得られていない。)

第二. 病理論解剖論

結節形状

局処感傷

汎発性〔全身副発状〕

第三. 見症論

(甲) 各別症

第一. 病者局処感覚

第二. 打聴症 (今日の打診を意味する)

第三. 聞筒症 (今日の聴診を指す)

第四. 咳嗽症

第五. 咯痰症

第六. 声症

第七. 胸腔結構〔及ヒ呼吸応動症〕

第八. 脳〔神〕症

第九. 脊髓症

第十. 皮症

第十一. 筋肉症

第十二. 心臓〔脈管〕症

第十三. 腸胃症

第十四. 腹膜〔攣衝〕症

第十五. 尿症

第十六. 殖具症〔男子ハ淫情盛ニシテ全身諸力消耗スルマテ不休, 女ハ月経不順減少シ時ニハ全ク絶ス〕

(乙) 病状経過総論〔肺結節経過太タ異ナリ或ハ一二日ヨリ一週ニシテ己ニ死スル者アリ, 或ハ十年ノ久シキヲ経テ未タ死セサル者アリ〕

第一. 急性肺結節症

第二. 急性肺勞

第三. 慢性肺勞症

第四. 治方論

(甲) 素因已ニ顯ハルル者治方

(乙) 急性結節治方

(丙) 急性肺勞治方

(丁) 慢性肺勞治方

(戊) 見症法方 (対症療法の意とおもう)

以上の内容からみて前の少部分 (約 14 枚) が略

血篇であり、後の大部分(40枚余り)が肺結節であり、明かに2部に分たれる。1855年にドイツの内科医ウンデルリヒが著わしたものを蘭訳本をへて、尚中が1861年に邦訳したのであるから、肺結核に関する当時としては最新の知識を日本に伝えたものといえる。

尚中ら長崎より佐倉に帰る

関寛斎の長崎在学日記は文久2年1月24日に「曇、行装ス」の短い一文をもって終わっている。その2日前の22日にも「行装」とあり、さらに4日前の18日に「佐氏別杯」とある。尚中らが長崎を去る日が近づいたことが推察できるが、その詳細が述べられていないのは残念である。

佐倉藩御用留の文久2年3月14日の条には「佐藤舜海達、私儀医之儀ニ付、長崎表江御内用ニ而……、去々月廿五日彼地出立、去ル六日江戸表江着仕、御用向相済、昨十三日同所出立、途中一泊今夕帰着仕候由」とある。尚中の長崎出発が文久2年1月25日で、佐倉到着が同年3月14日の夕方であったことがわかる。その経路について村上一郎氏が「蘭医佐藤泰然」の中で「舜海は2月18日夜には同勢5人を以て大阪に入った。滞在3日。21日には大阪出発中仙道經由にて江戸に向った」と書いている。これは大阪より舜海が佐倉の芳野屋常五郎あてに出した書翰により分った由である。

さて、尚中が長崎を去るにあたって、師のポンペが若干の洋医書を尚中に与えたと思われる。谷中にある尚中顕彰碑の漢文では「学成り東帰スルニ及ビ、贈スルニ外科書数部ヲ以テス。皆歐洲名医ノ著ス所ナリ。先生熟読玩味大ニ得ル所有リ」とある。その数部が何々であるか、それがみな外科書であったか、記録がないので不明だが、ドイツ人ストロマイエル Georg Friedrich Louis Stromeyer (1804~1876) の外科書がポンペより贈られたことは確かである。

慶応元年秋8月に尚中が凡例を書き、出版はその翌慶応2年と思われる「外科医法」巻1にはストロメールはドイツ国の外科医学教頭、兼外科眼科両術の治官で、その術をエレービュルグ、ブレ

スカウ(共に地名)など、その外の病院にても専ら博く施したとある。ストロマイエルは1842年からフライブルグの教授となり、6年間そこにいた。彼の外科全書 Handbuch der Chirurgie が出はじめたのは1844年 Freiburg im Breisgau というので、尚中の凡例にある1845年と1年の食いちがいがある。あるいはこの45年はブ・フ・シュエルマンの蘭訳本がでた年であるかも知れない。

和蘭の医官 ポンペ・ハーン・メールデルホルトは長崎において、この書により日本人に外科医方を教えた。そして別れに臨んでこの本を自分にくれたというのである。「およそ二十年前までは英仏の外科医方万国に長せしを、此ストロメールとデフヘンバックの両傑ドイツ国に起りてより、外科術も復ひ万国に勝れたり、されは此両書を宗となして外科医方を施しなんには、彼地に至らずして、其堂に上り室に入ることを得べし」とポンペが云ったとある。デフヘンバックとあるのは Johann Friedrich Dieffenbach (1792~1847) にちがいない。しかしその著書を尚中が別離のとき贈られたという証拠はない。

尚中の訳本で最も早く刊行されたのは「^{ストロマイエル}斯篤魯黙児砲痕論」2巻で慶応元年乙丑五月刻成とある。これは上述のストロメール外科全書とは別の本を訳したとおもう。本文の最初に千八百四十九年吾国セネマルカ国と確執起り、予医長を奉りて、スレースウエーキ・ホルステインの軍隊に在て野戦に赴き親しく二千余の創者を療せしに……」とある。ストロマイエルはフライブルグからキールの教授に転じ、シュレスウィヒ・ホルスタイン陸軍の軍医長となり、1849年と50年のデンマーク戦争で大いに軍陣外科の知見を広めて、1854年にはハンノーバー陸軍の軍医総監となった。彼の著書 Maximen der Kriegsheilkunst (Hannover, 1855) がおそらく原本をなしており、1867年(慶応3)にでた Erfahrungen über Schusswunden im J. 1866 は題名こそ似ているが、尚中の砲痕論の原本ではあり得ない。従って Maximen der Kriegsheilkunst の蘭訳本は彼の長崎出発にあたりポンペから贈られた可能性がある。